書　評・紹　介

稲葉寿編著

『現代人口学の射程』

ミネルヴァ書房，2007年12月，pp.260

本書に副題をあえて付ければ「人口学の復権」であろう．人口学の源流は経済学，統計学と同じくグラントやペティの政治算術である．しかし日本では人口学は学問としての市民権を持たず，その業績は社会学，経済学の片隅で埃を被り光り輝くことはなかった．今日少子高齢化が大問題となっているが，人口学プロパーの学者の発言•発信は少ない．

この本の表紙の帯に「今こそ人間社会の基礎学としての人口学の出番ではないか！」とある．人口学は一応社会科学に属しているが，実は大いに自然科学的要素を備え，要因間の関係が安定的であることが多く，ほかの社会科学と比較し堅牢なモデル化が可能で，人口分析・将来人口推計は精緻・正確である．そこで本書は，現在人口研究の第一線で活躍中の俊秀11名を揃えたアンソロジーである．

第Ⅰ部は日本人口の形式人口学的分析の論文５編を掲げる．それらは岩澤美帆「晩産化と人口変動」，金子隆一「高学歴化と出生率変動」，鈴木透「日本人口絶滅へのシナリオ」，石井太「人口指標の精度について」，小山泰代「世帯から見える日本のすがた」である．岩澤は出生率変動におけるテンポ効果を取り上げ，出生タイミングを早める政策が生涯子ども数を増やさなくても出生率を上げる可能性があることを教える．金子も出生率のテンポ効果に着目し，高学歴化と出生率変動のモデル化を行い，卒業年齢早期化が出生率上昇効果を持つことをシミュレーションで示した．鈴木は慣例的な安定人口によるもののほかに，コウホート出生率がさらに低下する急速な絶滅シナリオを描く．石井は日本でこれまでタブーに近かった人口統計データの評価検定を，統計学の確率論に基づき行った．将来は人口変動方程式等による人口学的評価検定に期待したい．小山は社会変動による世帯構造の変化を正確に論ずる．

第Ⅱ部は「越境する人口学」と題され，堀内四郎（米国在住）「老化と寿命の人口学」，加藤久和「低出生力は経済成長の帰結か？」，津谷典子「イベントヒストリー分析の歴史人口学への応用」，中澤港「小集団人口学」，梯正之「感染症の人口学」の５編から成る．堀内論文は生命科学との共同研究を通じて随所に新しい知見を提供する．例えば，老年後期で淘汰的生存によって死亡率上昇が鈍化・停止するとの新事実が明らかになった含意は大きい．加藤は近年の人口学と経済学の接近，連携を適切な事例で解説し，津谷は新しい統計手法の歴史人口学への貢献を丹念に示す．中澤と梯の論文の内容は一般の人口学徒には始めてのものが多いが，興味深い．

以上の論文の研究内容を見て，人口学がその古い境域を越えて周辺科学になだれ込んだのか，あるいは生命科学，経済学，人類学，疫学等の方法論，ノウハウを人口学が自己の領域内に取り入れて発展したものなのかは，見方によって異なり得る．しかしいずれにせよ，人口学が優れて学際的であり，近年周辺部門との交流が盛んになった証しである．

第Ⅲ部は編著者稲葉による付論ともいうべきもので，人口学の基礎的数理，モデルの解説である．正確に理解するにはある程度の数学的素養が必要だが，それ自身格好の数理人口学入門となっている．

最後に望蜀の言を述べたい．第１は，「はしがき」のところで，何故日本で人口学が疎まれたかの背景と，今後どうしたら日本の学界で市民権が得られるかの戦略について，編著者の卓見が聴きたかった．「あとがき」に書いてもらってもよかった．第２は，人口学の優良製品である将来人口推計モデルの解説論文が慾しかった．そして第３に「人口絶滅のシナリオ」と関連して，W. Lutz らが最近論ずるような超少子化の罠に陥るという局面のモデル化を試みてもらいたかった．その場合単に人口学的要因だけでなく，社会経済的視点も必要である．ただしこれはないものねだりに近い．

いずれにせよ，この本は時宜に適った待望の書であり，人口学復権に向かっての豊穣な可能性を見事に提示している．

（河野稠果／麗澤大学名誉教授）